慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『ウッドヘンジ』の發見に就いて
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.1 (1930. 3) ,p.77- 101
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	附録 : 原始の石記念物
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ウッドヘンジ』の發見に就いて

エーヴェリとストーンヘンジがイギリス最古の二大都址であることは、今日何人も疑ひ得ない所であらう。エーヴェリは『そが今日世界に殘存せる最大巨石記念物を代表する』(一)ものとせられ、ストーンヘンジは『大ブリテンの先史記念物で、その起源と日附と目的とに關し、これほど議論を生じたものはない』(二)とすら言はれ、後者はつい先年再び議論の的となり、更に之について再調査を遂ぐるに至つたのであつた(三)。斯くも重要なる二大巨石記念物が互に相距ること遠からざる地方に建設せられ、兩者が建築技術上の精疎よりして、互に相關聯せる同一時期の前後に於て造られたものであることは、既に本誌に於ても紹介した所である(四)。兩者は、何れも巨石記念物として知られてゐる如く、その材料を石に仰いでゐるのであるが、是等の巨石記念物に、恰も鐵道が木質の軌道より進化せる場合の如くに、木造記念物の原型があらうとは、世人の、或は考古學者ですらも想像しなかつた所であらう。然るに、前記兩記念物より程遠からざるの地に於て、今回『ウッドヘンジ』の發見せられたことは、この種の巨石記念物に

も木質の原型があつたことを實證するものであつて、歴史的發展の見地からしても少なからざる興味を覺ゆるものがある。之に就いての詳細なる記事は、その夫君と發掘を共にせるカニントン夫人によつて記されたWoodhenge. By M. E. Cunnington, Devizes, 1929. を見るべきであるが、こゝには、余に初めて之を教へて呉れた昨一九二九年十二月五日のロンドン・タイムス週刊の記事により之を左に摘記することゝした。

『ウッドヘンジ』といふ語はイギリスではもう既に日常の用語となつてゐるさうであるけれども、本邦ではまだまだ新しい言葉であらう。隨つて適當なる譯語も見出されないほどである。これはストーンヘンジと同樣譯し難い言葉であつて、寧ろ譯さない方が便利であらう。Woodhenge と言ふのはその語形からして察せられる通り、Stonehenge に擬へて作つた新造語である(五)。ストーンヘンジが石の構造物であるに對して、ウットヘンジは木から成り、數十世紀の星霜に曝されて腐朽し、今日は木質の部分を存しないけれども、之が石造であつたならば、ストーンヘンジと同樣の構造であつたらうと推定せられる先史時代の構造物を指すのである。この語は本來一九二五年十二月に初めて見出されて

圖示表蹟遺のジンヘドツウ

圖中に白く見ゆる點々は往昔木柱の直立してゐた筈の遺穴をこの度びコンクリートの低き圓柱を以て表示せるもので、之により、もとの六個の同心圓環は一目瞭然たるに至つた。（タイムス週刊より複製）

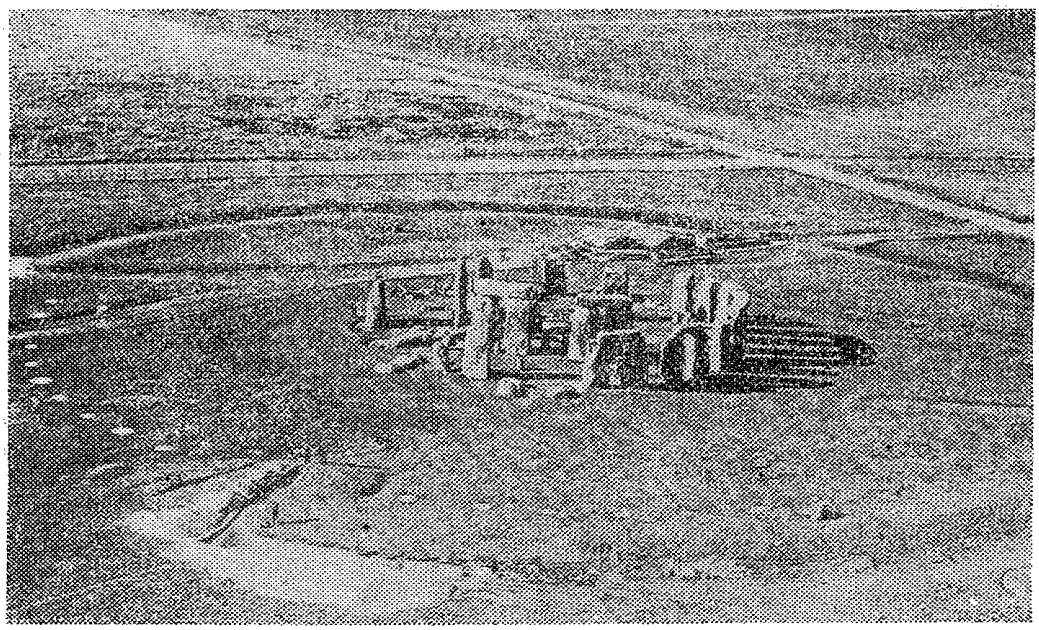
爾來綿密なる發掘を仕遂げたるイギリスのウィルト州に於ける遺址に適用せられたが、極く最近にはノーウッチ(Norwich)の畑にも他のウットヘンジが發見せられた。兩發見は何れも近時考古學上に多大の貢献をなせる新技術たる航空寫眞(六)により可能とされたものである。

ウィルト州のウッドヘンジは一九二六、七、八年の三夏季に於て、カニントン氏夫妻によつて發掘を完成したのであるが、このウッドヘンジはダーリントン(Durrington)寺區内の畑の中にあつて、エムズベリー(Amesbury)から北方約一哩半、ストーンヘンジから東北方約二哩、エヴォン(Avon)河から數百碼の處にある。この發見は奇異なる好運に惠まれたのであつて、一九二五年十二月十二日、航空少佐 Insall 氏がストーンヘンジの上空約二千尺の高所を飛行せる際、偶然ダーリントンの城壁附近に、中央に白堊の標識(マーク)のある圓環に氣付いたのに初まるのであつて、氏は之を寫眞にとり、同所の觀察を續けてゐた所、翌年の夏七月に至り、氏自からの言葉によれば『小麥がこの場所から

ストーンヘンジの石

左は三石體、右は Friar's Heel (一九二六年九月十一日筆者撮影)

悉皆取除かれたとき、も早や何等疑はれなかつた。點々からなる五六個の圓環が出現した』のである。

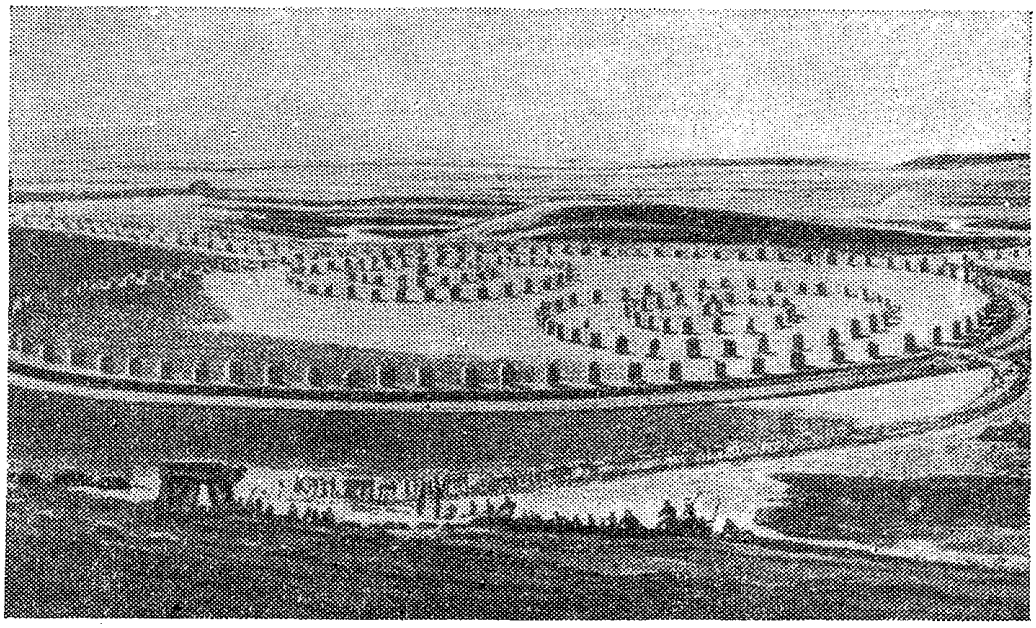


ストーンヘンジ全景（航空撮影）
左方の半圓形をなせる白點はオーベリー穴

發掘はやがて開始せられた。土壤が取除かれて原のまゝの白堊の表面が露出されるに及んで、長らく遺失せられてゐた記念物の全幅が窺はれるに至つた。古き凹穴は小麥の中の點々と一致せることが知られ、その性質からして、是等の遺穴には全く直立柱（アプライツ）がなかつたのではなく、木質の直立柱で充塡せられてゐたことが分る。土壤中に發見せられた木炭を分析して、この直立柱は、あるものは樫（オーク）、あるものは樺、あるものは松なることが推定せられた。

こゝには、この遺穴からなる總計六個の同心圓環があつて、それ等は、一番內部なる楕圓形からそが外方へ擴がるに從ひ、一層正圓形に近き形狀をとり、幾何學的熟練を以て排列せられてゐる。一番內部の圓環からして外方へと各圓環はそれ〴〵一二、一八、一八、一六、三二、六〇個の遺穴を算へる。十六個より成る圓環の遺穴の大さは、他の圓環のそれよりも大である。外圓環の外側に

は壕があり、その向にはバーム即ち平たき段があり、その外には堤がある。さうしてこの堤は諸處耕作のために破壞されてゐる。全地域はカニントン氏夫妻の買收する所となり、同夫妻はこの記念物の性質を永久的に明示し得るやう、その遺穴の中に、コンクリートの低き圓柱を立てた。カ氏夫妻に於ては、この遺蹟を公共團體に交附して之にその保護を委ねる意向であるといふ。



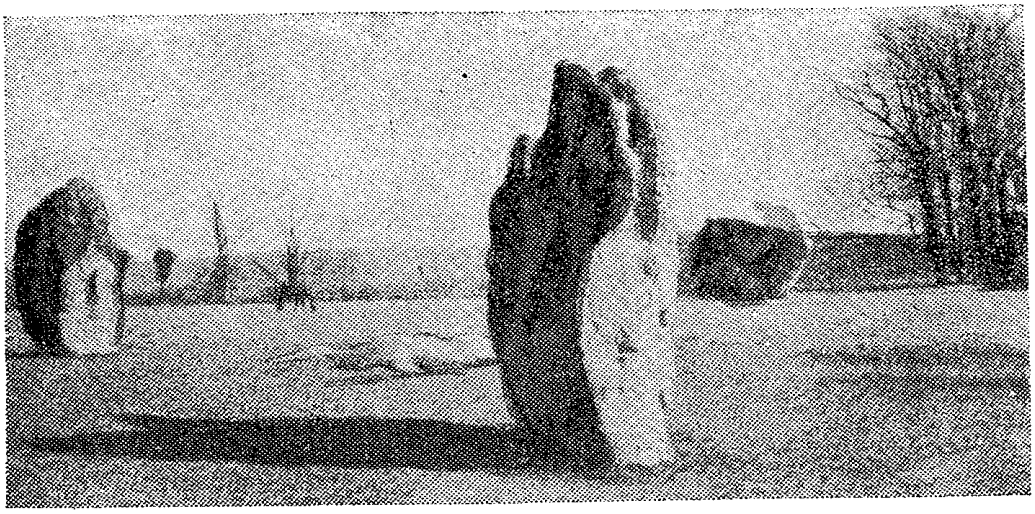
圖原復遺蹟ーリエヴーエ

（よせ照對と圖示表蹟遺ジンヘットウ）

しかし發見せられた遺穴すべてが圓環を形成せる遺穴からなるのではない。そこには重要なる他の遺穴がある。一つは夏至日出の照準點を暗示するが如き位置にあり、之と一直線上にある他の遺穴は冬至日沒時の同樣の位置を暗示し、第三の遺穴は兩分時に關係を有する樣であり、第四の遺穴は南點(South point)を標識する積りであつたらしい。しかるに一番內部の圓環內にあつて、夏至日出時の線上にある他の遺穴は、白堊中深さ約一尺に過ぎない小墓なることが證明せられる。その中には三才位の小兒の屈葬せる骸骨があつた。その頭蓋骨は埋葬前に裂開され

た様である。故にこは恐らく奉納物即ち犧牲なのであらう。外壕には青年の骸骨が見出された。

ウッドヘンジが二哩先きのストーンヘンジに對する關係は、カニントン夫人の言ふ所によれば兩者の平面圖は幾多の類似點を示してゐる。ウッドヘンジの内部の四個の圓環は、その位置も廣さも殆んど正確にストーンヘンジの四環と平行し、更にウッドヘンジの最外側圓環の長徑はストーンヘンジのオーブリー環のそれの半分であり、また右の圓環内の遺穴の間隔も同環のそれの約半分である。ウッドヘンジの中央の墓は、ストーンヘンジの祭壇石と相對的に同一の位置にある。兩記念物は夏至の日出の方へ向つてゐる。兩所には精密なる幾何學的表示がある。次ぎに、兩者の何れが舊いかと言ふに、カニントン夫人の信ずる所では、ストーンヘンジの全體の配置は他よりも良好であり、より規則正しく、その石造物なる點に於てより建築上の熟練が加はつてゐる。故に、ストーンヘンジがかくも近き地に於いてより劣等なる材料を以てし、技術的意匠の劣れる建造物を模倣したとは想像し難いのである。時點についてはウッドヘンジは、その地に發見したる土器により種



エーヴエリーの石

々の困難が提起される様に見えるけれども、カニントン夫人の主張する所では、『中青銅器時代の初頃より早くはあり得ない。故に之がストーンヘンジの先輩であり原型であるとすれば、この記念物は少なくとも中青銅器時代頃のものでなくてはならない。それに、ある別の證據の暗示する所では、より遲いかも知れない』と言ふのである。（一九三〇・三・二七稿）

註

一、H. J. Massingham, Pre-Roman Britain, London, 1927, p. 9.

二、『大英百科辭典』第十一版第二十五卷九六一頁。

三、一九二四年頃の英國諸雜誌掲載の論文及び E. Herbert Stone, The Stones of Stonehenge, London, 1924. の如きその所產の一である。

四、『ペリーのイギリス最古の文明』史學第八卷第一號、一〇三—一二六頁。

五、Stonehenge はサクソン語で Stanhengist 即ち hanging stone を意味する（『大英百科辭典』第十一版第二十五卷九六一頁）といふのであるけれど、こゝではその原語義には關係なくストーンヘンジの現在の字形からして類似の語形をとつたことを意味するのである。

六、『大英百科辭典』第十三版第二十九卷『考古學』第十九節『航空調査』の項、一九七—八頁及び同所の寫眞版を見よ。

附錄

原始の石記念物

英國の考古學者ロバート・マンロー氏の『大英百科辭典』第十一版中に掲載せる表題の項目(Stone Monuments, Primitive)は別項の記事の了解にも幾分資する所あるべきが故に、こゝにその譯文を附載することゝした。なほその後の考古學的研究全般に亙る進歩については、同辭典新版『考古學』の項を參照すべきである。

石といふが如き永續性の材料を以てせる記念物の建設は、凡ゆる國に於て最も遠き昔に溯り得る慣習である。近代文明の盛んに彫刻したる立像やオベリスク、その他の記念碑的建設物は、先史時代の自然のまゝの單石(一)ドルメン、クロムレク等の系統を引ける代表物に過ぎない。幾多の星霜を經て破壞作用(特に人間自身のそれ)を受けつゝもなほそを免れて殘存したる先史記念物の多數である所から判斷すれば、その建設を導きたる動機は現時に於けると同じく、その初期の發展階段に於ける人類文化に大に根據を有する樣に見える。ブリテン及び他處に於ける是等疎雜なる原始的記念物の特性を幾分明かにするのには、之を次の如く分類することが便利であらう。(一)加工せざる自然石の一端を立てたる孤柱即ち單石(monoliths)は『メンヒル』と稱せらる。monolith とは *Μόνος*(單獨)に *λίθος*(石)の加はつたもので單石を意味し、*menhir* とはコルニッシュ語の maenhir, で、ウェールズ語で *maen*(石)に *hir*(長い)が加はつたもので、長石の義である。(二)是等の單石が列狀に排列されたときには、列石 *alignments* (*ad*, to＋フランス語の *ligne*, a line)となる。例へば佛のカルナーク(Carnac)のメネク(Ménec)にあるものゝ如きである。(三)しかし、その線狀排列が、その形の正圓不規則圓或は

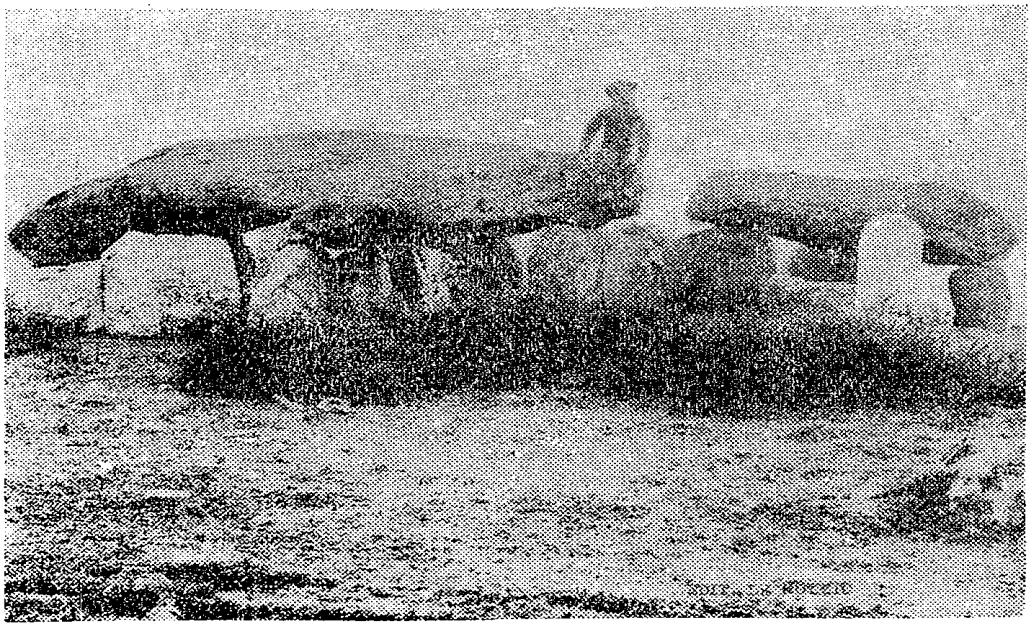
楕圓なるとを問はず、環狀を形成する樣の場合には、この集團は *cromlech*（ガリヤ語の *crom*（曲った）＋ *llec* ウェールズ語の *llech*（石））の名を以て呼ばれる。例へばアイルランドのカローモーア（Carrowmore）に於けるものゝ如くである。（四）單石が前掲構造物の如くに分離しないで、互に密接して、疎雜なる室を形成する樣に一個或はそれ以上の頂石（かさいし）を以て屋蓋を作り得る位の狹隘なる地域を圍繞せるときには、この記念物は『ドルメン』（ブリトン語で *dolmen, dol,*（卓）に *men,* ウェールズ語で *mxn*（石）が加はつて卓石）と呼ばれる。佛のカルナークのケリアヴァル（Keriaval）のドルメン、蘇のアイルスフォードの Kit's Coty House の如きその例である。この巨石の室は時によると全たく埋められて、外觀は高塚（tumulus）又は石塚（cairn）の形狀を示すやうに土或は石を以てせる墳丘とされてゐることがある。

Ménec の **メンヒル**（Carnac）

がしかし巨石の室を含んでゐない高塚と石塚も澤山あるので、是等先史時代の遺跡が原始の石記念物の部類の中に加へられることは必しも正しくないのである。孤立せる二個の石が恰も戸口の楣の如くに第三石を支ふる樣にドルメンが構成せられた稀にある例に於ては、この記念物は三石體（*trilithon,* τρι＝τρεις（三）＋ λιθος（石））と呼ばれる。例へばストーンヘンジに於て見られる如くである。

メンヒル（單石又は立石）一端で立てる疎雜なる單石は、國王や酋長の登位の際に於ける如き種々なる祝典、

或は戰場墳墓境界線等の所在を劃せんが爲に、凡ゆる時代に建設せられた樣に見える。大英群島の全般を通じて斯樣な立石は廣く分布し殊に文化の劣れる地域に多い。スコットランドに於ては、王に戴冠を行ふ際の式典に石の用ゐられたときに、この石は(tanist stone)(相續者の石の義)と稱せられた。その中で最も著名なのは、もとスコーンにあつた(今はウェスミンスター寺にある)Lia Fail であつて、この石の上でスコットランドの諸王が戴冠される習であつた。又 hare or hoer stones, cambus or camus stones (*cam*, 曲つた) Cat (*cath*, 戰爭) stones, witch stanes, Druid stanes など記されてゐる、バース州の聖マドーズの鷹石即ち *Saxum Falconis* はランカーチーに於けるデーン人の敗北を記念する爲に建立せられ、今日フロヅンの畑に立つてゐる單石はジェームス王の戰死した場所を標識するものと言はれる。メンヒルが集團をなしてゐるときに、その數は屢〻意義あるもので例へば十二(約書亞記第四章第五節)或は七(『ヘロドトス』第三章第八節)の如き是である。數個の立石は人爲的に穿孔せられたるが見出され、是等には迷信が、若干の奇異なる儀式を結附けてゐる。この種の例と見られるは、Stennis の環狀列石の附近にある有名なる Stone of Odin アージル州の Balachulish 附近の Onich の Clach-Charra 即ち復讐石及びコーンウォールの Men-en-tol (有孔石)である。スコットランドの二個の疎雜な單石には銘刻があ

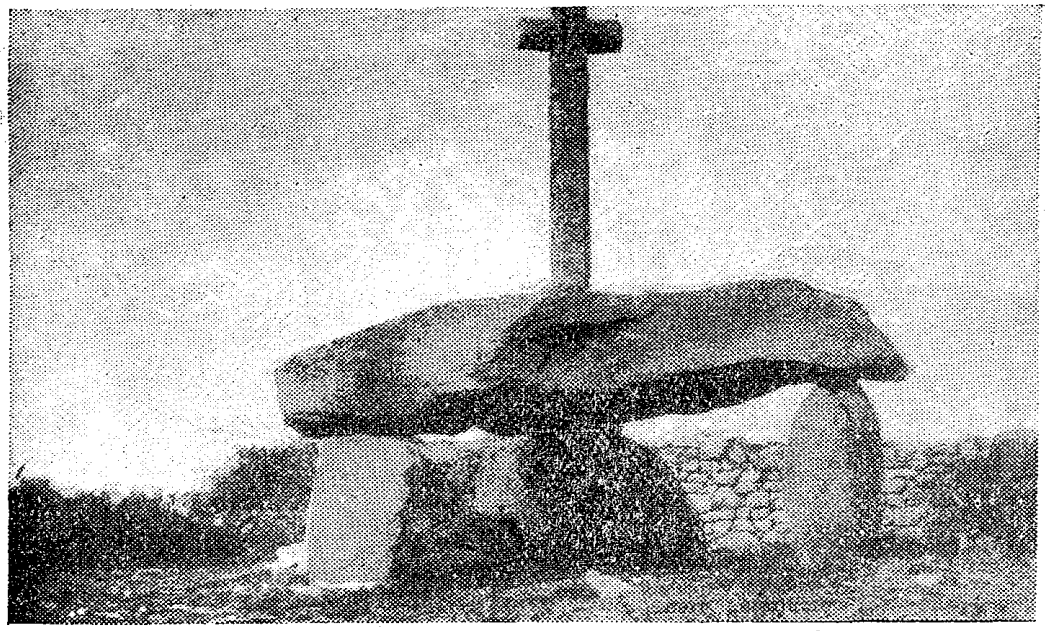


Keriaval のドルメン (Carnac)

る。それは Garioch 地方の有名なるニュートン石とエヂンバラ附近の Cat Stane（戰爭石）である。他のものはコップと輪印、渦卷或は同心圓環を有してゐる。アイルランド、ウェールズ、及びスコットランドに於ては、オガム語の銘刻あるもの、スコットランドの東北部（ピクトランド）には或る顯著な未だ說明の附かぬ象徵的圖樣のあるものが折々見出される。是等の圖樣はその地方に澤山に見出された初期キリスト敎時代の精巧なる彫刻を施した切石の上に繼受せられてゐる。イングランドに於ては單石は屢クロムレク即ち環狀列石と結ばれてゐる、例へば Stanton Drew の王の石、Little Salkeld の Song Meg. エーヴェリーの環石（リングストン）の如きである。ブリテンの單石中最も精巧なるものゝ一はヨーク州の Rudston 敎會境內の墓地に存するものである。

メンヒルは巨石構造物の豐富なるすべての國に見出される。フランスに於ては一千六百有餘の別個の例が記錄せられたが、その中約半數さうして特に最も顯著なるものはブルターニュを組成せる五縣の中にある。爾餘のフランスに於けるそれは概して少さく、その容積はブルターニュのそれに比較さるべくもない。モルビアン（Morbihan）のロクマリアケ（Locmariaquer）には世界最大なるメンヒルがある。そは平滑なる側面を有するオベリスク形であつたが、今は地上に仆れて四片に破碎してゐる。その全長は二十米五〇サンチ（約六十七尺）である。このメンヒルはその附近に知られない花崗岩からなり、その重量は極く最近の計算によれば、三十四萬七千五百三十一瓩、即ち三百四十二噸である（*L'Homme*, 1885, p. 193）。これに次いで大なるメンヒルは Plésidy（Côtes-du-Nord）にあつて、高さ約三十七呎である。次ぎにその高さは漸減して十六呎に至るまでのもの六十七個の表があり、その中の最初の十個（二十六呎以上のもの）はブルターニュにある。是等メンヒルの形狀は大に相違し、Dol の熟知せられた *pierre de champ-Dolent*（高さ三十呎）や Finistère の Cadiou のそれ（高さ二十八呎）の如き、圓柱狀のものもあれば、また（Penmarch）のそれ（二十六呎）の如く偏曲扇狀

形のものもある。Médréac (Ille-et-Vilaine) に於ける石英のメンヒルは紛ふ方なく切斷せられたる方柱狀のもので高さ十六呎半である。フランスにキリスト教の移入された際、その信徒達は初期に於て是等のメンヒルを利用した樣に見える。その多くは現時十字架を支へて居りまた聖母の像を載せたものもある。ある單石の分布狀態は是等が時折土地の界標に用ゐられ、或は恐らく獵師の待合所に利用せられたことを暗示するも、他の單石の奇異なる集團は是等が第二義的の附屬的機能をなせるに止まることを示す。スコットランド、アイルランド及びウェールズの立石の若干の上に見出されるオガム語の碑銘が、この問題に光明を投じたる限りに於ては、こは墳墓の竿石であつた樣に見える。高塚の上に單石が聳え、かくしてスカンヂナヴィヤの bauta（墓或は戰爭）石に擬せられるものを見出すことは稀でない。アルゼリヤ、モロッコ、インド、中央アジヤ等に於ても、あらゆる容積のメンヒルに出會する。



Cruz-Moquen のドルメン (Carnac)

列石　この種類に屬するものゝ中、最も有名なる記念物はブルターニュのカルナークの近傍に見られる。是等はメネク (Ménec) ケルマリオ (Kermario) ケルレスカン (Kerlescant) エルドヴァン (Erdeven) Ste Barbe に集團を爲して存し、すべて相互から數哩の範圍内にあつて、この地方の中央には世界中の最も著名なる巨石の遺物を存する。最初の三集團は若干

考古學者に依つて列石のもと連續的系列をなせるものの單に部分を爲すに過ぎざるものと想像せられこの列石は西南から東北へと劃一の方向をとりて長さ約二哩に及んでゐたとされるのである。このメンヒルはメネク村を起首として、十一列に擴がつてゐる。起首に於ては地上十呎乃至十三呎の高さであるけれども、我等の進行につれ、漸次少さくなり、遂に三四呎の高さに過ぎざるに至り、次いで全く姿を失つてゐる。凡そ三百五十嗎の空地を經て、ケルマリオ集團へ達する。これは僅かに十線を含むに過ぎないけれども、このメンヒルは前集團の起首に於けるものと殆んど同じ大いさである。更に大なる空隙を經たる後メンヒルは再びケルレスカン村に於て出現する。けれども、今回は十三列である。一八八一年に、プルアネルのガイヤール(Felix Gaillard, Plouharnel)氏はエルドヴァンの列石平面圖を作製した。それよりして本年この集團を形成してゐたメンヒル總數一千一百二十個の中、二百九十個は現存し、七百四十個は倒れ、九十個は取り除かれたようである。この處のメンヒルは約一哩間搜索し得るも、その線列の排置はカルナークのものほど明白でなく、石もそれほど大きくない。約五十個の列石がフランスに知られてゐる。パンマルクには四列二百個以上を含むものがある、併し他のものは Kerdouadec, Leuré, Camaret に於ける如く、唯だ一列で形成せられてゐる。右の第一は長さ四百八十米あつて、その南端に於ては一種の卐字形(croix gammée)に終つてゐる。リューレのものは三個の短かい線列が直角に出會してゐる。第三のものは Cavnaret 町と Toulinguet の岬との間の隆起地にあつて四十一石(他のものは明かに取り去られた)を有する約六百嗎の基線と短かき支距として二個の矩形線とよりなり之に近接して一個のドルメンと一個の仆れたメンヒルとがあつた。是等の單石は皆疎雜な石英から成り小形であるがしかしリューレの一個のみ九呎の高さに達してゐる。列石はまたピレネー山脈側面の地域にも見出されるけれども、この地のものは概して一列であつて、多くは直線であるが、時には爬蟲狀のものもある。Peyrelade (Billière) の

一は北から南へと約三百碼の間一直線に走り、九十三個の石を含み、その若干は大形である。コーンウォールの St. Columb には九人の乙女（Nine Maidens）と稱するものがあつて、八個の石英から成り、二百六十二呎の間完全なる直線をなして擴つてゐる。しかるに、ブリテンに於ける列石は一層頻繁に二列に排列せられた、換言すれば、エーヴェリー、ストーンヘンジ、Dartmoor, Shap, Callernish 等のクロムレク即ち環狀列石と關聯して、現存し或は曾つて存したる如き、他の巨石記念物へ赴き或はそれより發する大通路に配置せられたのである。Lewis 島のカラーニッシュに於ける環狀列石は北方に向つて走れる直立石の平行せる二列と之と交叉せる一線、從つて十字形を呈し、非常に精緻なる意匠を示してゐる。頗る高きメンヒル（長さ十七呎）は環狀列石（直徑四十二呎）の中心を占め、時代の經過につれ深さ五呎に堆積したる泥炭は一八五八年に取除かれ、爾來この顯著なる記念物の特有なる形狀は示されるに至つた。佛のカルナーク大列石に比すべきイギリスに於ける唯一の例はバーク州の白馬（White Horse）溪にあるもので、その石數約八百個を數へ、三班に集團せられ、長さ五六百碼、幅二百五十碼乃至三百碼に亘る不規則なる平行四邊形をなしてゐる。サー・ヘンリー・ドライデンは Garrywhin, Canster, Yarhouse に於ける如き Caithness の列石の數個の集團及び Clyth に於ける "Many Stones" を記述してゐる。（Fergusson, *Rude Stone Monuments*, p. 529.）一列及び數列の列石は又シェットランド、インド、アルゼリヤにも觀察せられた。

クロムレク（環狀列石）　ブリテンに於ては、クロムレクなる語の用法は、ドルメンなる語の用法と事實上同意義である。けれどもフランス及び大陸一般に於ては、この語はイギリスに於て環狀列石（"stone circles" or "circles of standing stones"）なる表示的名稱のみが使用せられてゐる所の記念物の種類に專ら適用せられてゐる。この術語は諸國に於いて諸種の記念物に適用せられてゐるため若干の混雜を生じた。この語を最も舊く使用せる例はモルガン司教の聖書のウェールズ語譯（一五八

八)の中に『岩石の裂片』が *cromlechydd y creigiau* と譯されてゐる箇所である。ブリテンの考古家によつて連續使用せられるに至つた特別の意味で最古の例はグリフィス師(Rev. John Griffith of Llanc'dyfnan)がある古代の遺物を記述(一六五〇)せる中に、『傳說によれば Bronwen Leir が葬られたといふ Alaw から程遠からぬ處に曲つた小さい石室がある。この國によくある斯樣な小さい家は *cromlchaw* といふ適切な名稱で呼ばれてゐる』と彼は言つてゐる。この項目ではクロムレクなる語はその大陸での意味を保留し、專ら數碼の間隔に配置せられた疎雜な單石で形成せられた圍繞(アンサント)を表示するに用ゐる。斯樣な圍繞は概して圓形或は楕圓形をとるので之が環狀列石と記述せられることが稀でない。しかし、方形の圍繞も知られなくはない。その實例は Curcunno (Morbihan) に於て、同名の著名なるドルメンの近傍に見られ、又 Saint Just (Ille-et-Vilaine) にも見られる。前者は三十七碼に二十七碼であり、今は二十二個のメンヒルから成り、その全部が存立して居る(政府の手により倒石は復原された)けれども、一ダース斗りが失はれてゐる。驢蹄鐵形(donkey-shoe-shaped)圍繞はサー・ヘンリー・ドライデンによつて Caithness の Latheron 寺區に記述せられてゐて、その長さ二百二十六呎、中央の幅百十呎、兩端の幅八十五呎である。環狀列石は屢々同心圓的に排列せられ、バース州の Aberfeldy 附近の Kenmore の環狀列石並にその他スコットランド、アイルランド、スカンヂナヴィヤの多くの例に見られる。更に稀なる一つの大なる環が共同の中心を有せずに內部の集團を取卷けるエーヴェリーの如きがあり、その外環(直徑千二百呎)は他の二個の環を取卷き、その環は各々同心の內圓環を含んでゐる。アイルランドの Down 郡の Ballynoe の環狀列石は內外の(偏心)圓環よりなり、內圓環は直徑約五十七呎二十二石、外圓環は直徑百五呎、四十五石からなる。コーンウォール州の Boscawen に於ては亂雜に連結せられ、一部重り合へる環狀列石の集團があり、又 Er-Lanic の小島(Garv'inis の有名なる高塚の附近)には複合クロムレク(今は一部水中に沈下す)があ

り、その環は互に交切してゐる。クロムレクは又前述の如く列石或は大通路と連結せらるべく、又屢々他の巨石記念物と關聯される。故にカルナークの大列石の一端に、大環狀列石の遺蹟がある。その地域内に人家が建てられてゐるけれども、容易に之は明かにし得る。大英群島及びヨーロッパの北部に於ては、是等は屢々ドルメン、（アイルランドの Carrowmore の例）高塚、石塚を取卷いてゐる。一個或は數個の環狀列石に取卷かれてゐるドルメンの少數の例は、Cartailhac によりフランスの Aveyron 縣から記述せられた。環狀列石の外部には、エーヴェリ、ストーンヘンジ、アルバー丘、Ring of Brogar 等の例に於ける如く、圓形の壕が屢々見出される。現存せる此種の最も顯著なる巨石記念物はストーンヘンジであるが、しかしそはその外圓環に一部分加工せる切石を有し横斷せる楣を以て連絡されてゐる點に於て、同種のものと異つてゐる。フランスに於ける最大のクロムレクは Ile-aux-Moines (Morbihan) の Kergonan 村にあつて、その半分斗りは今日人家の侵入によつて破壞せられてゐる。殘れる半圓形はその高さ六呎乃至十呎の三十六個のメンヒルを含み、その直徑は約三百二十八呎ある。このクロムレクは、多數のイングランドの環狀列石の如くに、圓形ではなくて少しく楕圓形である。ブリテンのクロムレクにしてこの面積を超ゆるものは、極く少數であつて、

ストーンヘンジ（西方から）

その中に加へらるべきものは、エーヴェリ（一二六〇に一一七〇呎）ストーンヘンジ（外環三〇〇呎、内環一〇六呎）スタントン・ドリュー（三六〇呎）、ブロガー（三四五呎）ロング・メグとその娘達（三三〇呎）である。直徑二九一呎、十一石からなる Dumfries 附近の、十二使徒と稱せられてゐるものは又フェルグッソンの所謂百米型に殆んど近い。しかし全般的に言へば、スコットランドとアイルランドの例は比較的小規模であつて、直徑百呎を超ゆるものは稀である。より小なる環狀列石の大部分が墓に用ゐられたことは、幾回となく現實の發掘により證明せられ、その地域内に土葬されてゐることが明示された。がしかし、之はより大なるものの主要目的であつたとは信じ難い。Penrith 附近の Mayborough には、巨大なるリング狀に、直徑約三百呎の平坦なる地域を圍繞せる小さい石の宏大なる集積から全部が組成された圓い墳丘がある。この空間は廣い孔口によつてリングに這入られ、その中央に近き處に、精巧なる單石があり、以前數個あつた中の一つである。ベルファスト附近の巨人のリングは同じ型式のものである。がしかしリングはこの場合には土で作られ、直徑は可なり大である（五八〇呎）が、その中央の物體は精巧なるドルメンである。斯の樣な圍繞が我等の近代の教會の多くのものの如くに、死者の埋葬と生者に話し掛ける二樣の目的に使用せられたことは、一層有り得ることである。

ドルメン　ドルメンの最も簡單なる型式は三個或は四五個の石の支柱よりなり、頂石（capstone）又は卓（table）と稱する一個の選まれたる巨石を以て蔽はれたものである。イングランドに於けるこの種類の著名なる例は、Kit's Coty House であつて、ローチェスターとメードストーン間に存在し、十一呎に八呎の頂石を以て蔽はれた三個の大なる支柱から成つてゐる。この簡單なる形狀を初めとし、構造上無限の變化があつて、所謂巨人の墓（Giant Graves）と仙女洞（Grottes des Fées）などに及び、後掲二種は夥多の支柱と數個の頂石から成つてゐる。Bagneux のドルメンは、Saumur 町の郊外の農園の一隅にあつて、長さ十八米、幅六米

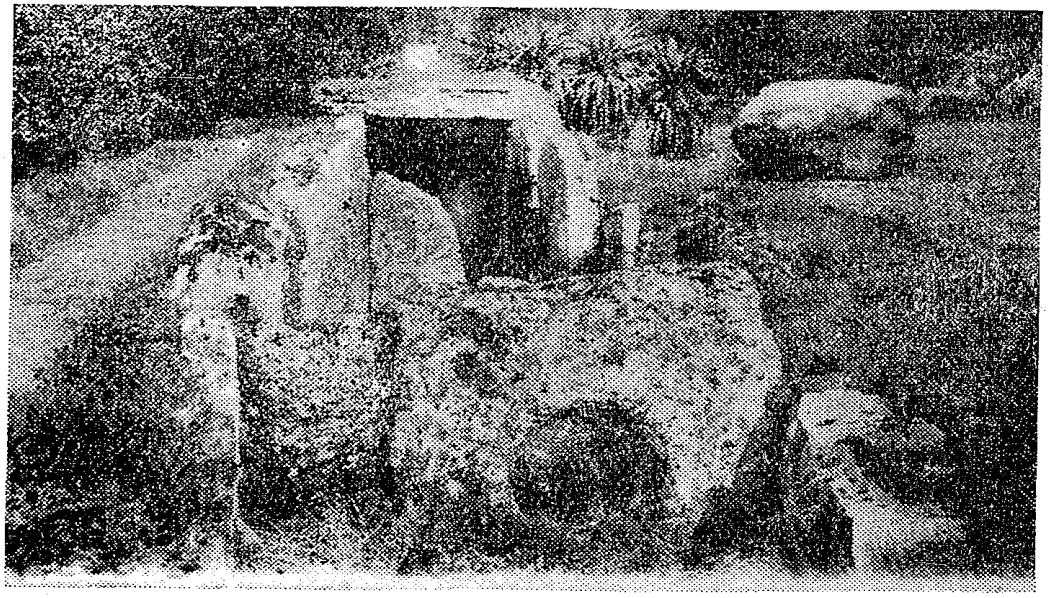
五〇サンチ、高さ三米である。各側四個の巨大なる板石と四個の頂石から成り、その頂石の最大なるは長さ七米五〇サンチ、幅七米、厚さ一米である。Essé (Ille-et-Vilaine) 附近にあつて『仙女巖』(La Roche aux Fées) と稱する他のドルメンは入口を含み三十個の支柱と八個の頂石より構成せられてゐる。この種類のドルメンは、大英群島に於ては極めて稀であつて形狀の之に比すべき唯一のものはアイルランドの Monasterboice 附近の Calliagh Birra's House であつて、各側面を形成すべく四五個の薄き石に端を支持せられた四個の頂石からなり、一石が一端を閉ぢてゐる。このドルメンはその容積の小なる（長十二呎に幅四呎）ために外觀は立派でない。一般に有蓋通廊 (*allées couvertes*) と稱せられる是等自由に立てる巨石の室並に簡單なるドルメンのその他多數の例は、土丘を以て蔽はれてゐたことの證據を示さない。そが土丘なるときには、大なるものに於ては、室と等しく一連の側石と頂石よりなる入口の通廊を必要とする。或る考古學者の主張する所によれば、ドルメンはすべて前には石塚或は高塚によつて蔽はれてゐたのである。これは疑ひもなく、殊にフランスに現存せる多くの實物の有樣から若干の根據を得たる說であつて、其地に於ては一部分を露出せるものから全部裸出の狀態に至るまで言はゞ退化の全階段が見られるのである。アイルラン

Hané-Hoëk の高塚（ロクマリアケル）

ドのニュー・グランジの高塚は之を構成せる土壌と石を取り除いてその入口の通廊と中央の室を形成せる巨石のみを殘留したと假定したらば、Lewis 島の Callernish に於ける單石の集團と相異する所なき頗る堂々たる巨石構造物が展覽せられるであらう。フランスとドイツと海峽群島の有蓋通廊はその一端に入口を有するも、之に反して、オランダのドレンテ(Drente)のそれら(Hunebedden)は兩端を鎖し、入口は太陽に面せる側面にある。有蓋ドルメンは極めて種々なる形式があり、普通に存するは、圓形、楕圓形、方形及び不規則なる形狀のものである。その大さは、通常の古墳(バロー)からニュー・グランジのそれに至るまでの差があつて、後者は截頭圓錐形狀に聳え、高さ七十呎、直徑は其底に於て三百十五呎、頂點に於て百二十呎である。その基底の周圍には、間隔約十碼に配置せられ、圓周一千呎なる凡そ三十個の疎雜なる單石の環狀列石があり、現在その處に殘れるは是等のメンヒルの少數に過ぎない。この大なる高塚の内部への入口の通廊は大約長さ六十三呎、高さ四呎九吋、幅三呎六吋であつて、若干の大なる石塊を露出してゐる。その十字形の室は長さ二十六呎、幅二十一呎、中央の高さ十九呎半である。入口の通廊は Grotte de Gavr'inis の如く、室の一端に連絡せられ、或は又 Roskilde 附近の Oem の巨人墓の如くに、側面に連絡せられる。他の例に於ては、何等明白なる室を有しないで、たゞ長き通廊が入口から徐々に擴がつてゐる。さうして之は Rocher (Morbihan) のドルメンの如く、一隅に於て曲つてゐるもあり、更に一つの入口の通廊に通ずる數室があり得る。或は數個の入口を有する二、三室は同じ高塚の中に安置されるもある。前者の奇異なる標本はジャージー州の St. Helier 附近の崩れた、高塚の中に見らるべく、後者の適例はブルアネル停車場近くの Rondosec の一部分壞れた高塚であつて、三個の獨立せるドルメンを含んでゐる。斯樣な異種は地理的範圍の廣汎なる事の結果、異れる習慣に基づくものでないことは、de Mortillet の示せる所であつて、モルチエー氏は何れもモルビアンの限定された地域内に存する十六個有餘の

形を異にせるドルメンの平面圖を與へてゐる。(*Musée préhistorique*, pl. 58)。

崩れたドルメンはドイツのハノーヴァ、オルデンブルク、メクレンブルクの諸州に豐富に存する。ハノーヴァのUelzen附近のRiestedtに於ては、高塚の頂上に、頗る珍らしいドルメンがあつて、その長さ約四十呎、幅六呎ある。ワイマー附近のNaschendorfに於ける他のドルメンは大なる環狀列石によりて取卷かれた土丘とそれの頂上にある有蓋の室とより成つてゐる。メクレンブルクのRudenbeckに於ける巨石構造物の遺物は今日は頗る不完全であるが、もとは有蓋通廊の如くに組立てられてゐたことを示してゐる之には各側面に四個、一端に二個(他端は開放せられて入口となつてゐる)の支柱と大なる二個の頂石がある。その完全なる姿に於ては、長さ約二十呎、幅七呎半、床から屋根の下面に至るまでの高さ三呎であつた。Bonstettenに從へば、是等巨石記念物の二百有餘がLüneburg, Osnabrück, Stadeの三州に分布し、ドイツ中の最も巨大なるドルメンはオルデンブルクにある。オランダに於ては一二の例外を際き、そはドレンテ州に限られてゐて、なほ五六十個を存し、Hunebedden (Huns'beds 匈奴の寢臺)と稱せられてゐる。その集團中最大なるBorger Hunebedは長さ七十呎、幅十四呎である。その原初の狀態に於ては四十五石を有し、その中十個が頂石であつた。ドレンテの記念物は今は全部が露出してゐるけれど



Aubergenville のドルメン（サン・ゼルマン・アン・レエ博物館）

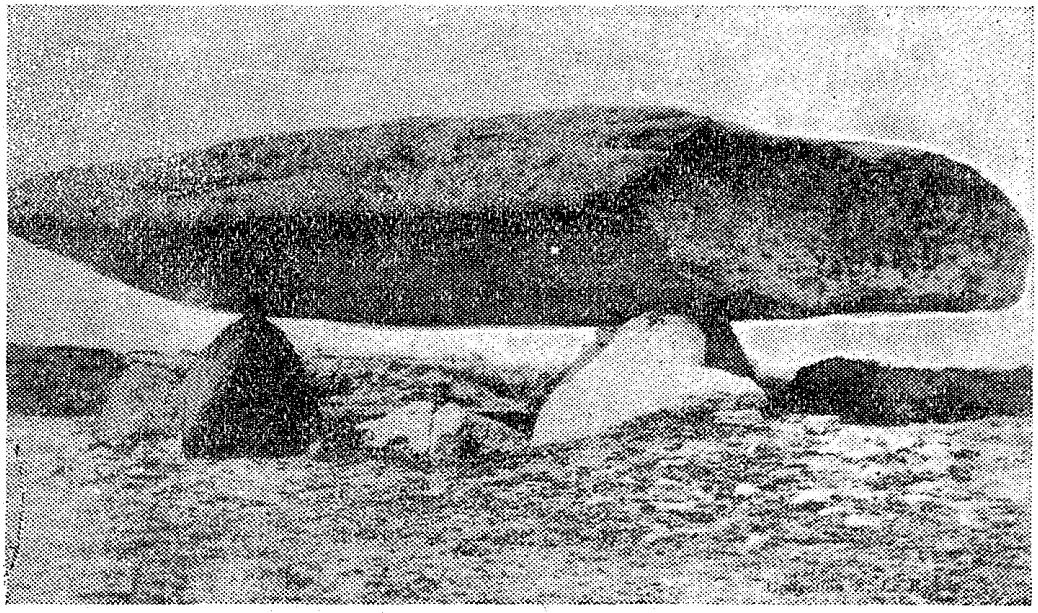
も以前には入口の通廊を含める土丘によつて取卷かれてゐたことを暗示する證據が少數のものによつて示されてゐる。ベルギーに於ては唯だ一個のドルメンが記錄せられてゐるのみであるが、フランスに於てはその數三千乃至四千に上つてゐる。是等は七十八縣に不規則に分布し、六百十八個餘りがブルターニュにある。國の中部にもその數多く、Aveyron に約四百三十五が記錄せられてゐる。がしかし、この地のものはブルターニュのそれに比して容積が遙かに小である。ピレネー山脈より、是等疎雜の巨石記念物はスペインの北海岸に沿ひ、ポルトガルを經てアンダルジャまで疎らに存し、アンダルジャには可成り多數に見出されるけれども、その正確なる數と分布については確實なる記錄を有しない。Cartailhac (*Âges préhistoriques de l'Espagne et du Portugal*, p. 152) によれば、一八七九年までに百十八個が *antas* なる名で記錄せられてゐる。その多くは自由に立てるドルメンと有蓋通廊式のものである。スペインに於けるこの種の最も顯著なる記念物で、且つ確かにヨーロッパ中の最も見事なるものゝ一つはMalagaの北方若干距離なる Antequera 村の附近にあるものである。室は少しく楕圓形で、長さ二十四米、幅六米一五サンチ、高さ二米七〇サンチ乃至三米である。この構造物總體には三十一個の單石を含み、各側面に十個、一端に一個、屋蓋に五個を有する。のみならず、屋根は室の最も廣き部分に於て、中央の列に沿ふて置かれた三個の柱によつて堅牢にされてゐる。巨石はこの地方のジュラ紀の石灰石よりなり、ストーンヘンジのそれの如く、一部研磨された樣である。全構造物は本來直徑百呎位の土丘を形成せる土壤を以て蔽はれてゐたのであるが今でも蔽はれた部分が殘つてゐる。アフリカに於ては、ドルメンはモロッコ、アルゼリヤ、チュニスに大なる集團が見出される。Faidherbe 將軍は Bou Merzoug, l'Oued Berda, Tébessa, Gastal 等の墓地に於て、五六千を調査したことを記してゐる。(*Congrès international d'anth. et d'arch. préhist.*, 1872, p. 408) 海峽群島に於ては、凡ゆる種類の巨石記念物に出會する。St. Helier 附近の

Mont Cochon には砂丘の中に近頃有蓋通廊が發見せられ、之に接して小なるドルメンを圍める環狀列石が見出された。大英群島に於ては、ドルメンは多くの地方に普及し、特にイングランドの西部、Anglesey, マン島、アイルランド、スコットランドに多い。しかしスコットランドに於ては、そは疎石記念物中の最多數にして顯著なる遺物ではなく環狀列石と箱形石塚が概して之に代はつてゐる。

サクソニーより向の東歐に於ては、ドルメンを有しないけれども、クリミヤと內コーカシヤには再現し、それより中央アジヤを經てインドに求めらるべく、インドには之が廣く分布してゐる。類似の構造物はパレスチナ、アラビヤ、ペルシヤ、オーストラリヤ、マダガスカル、ペルー等に於ても旅行者に認められた。是等巨石記念物が海岸の緣邊を辿つてヨーロッパの西部に不規則に分布してゐることは、之が特殊の民族によつて建設せられたものであるといふ說を生じたけれども、この巨石人種が如何なる時に何處から何處へ赴きたるやについては何等知られてゐない。歐洲のドルメンは廣く離れて存在してはゐるけれども、非常に類似點を有してゐるが、しかし或る地方にあるものは顯著なる相違を示してゐる。スカンヂナヴィヤに於てはデンマークの諸地、とスエーデン南部の小數の州に限られ、前者に於ては露出せるドルメンが屢々人造の土丘の上に建てられ、圓形(*runddyssen*)或は橢圓形(*langdyssen*)のクロムレクによつて取圍まれてゐる。スエーデンに於ては、*sépulture à galerie* はデンマークの巨人墓の如くに、全部が蔽はれてゐることは頗る稀である。

歷史的記錄と科學的研究の缺けたる爲に、從來是等諸種の原始の石記念物は、すべてケルト起源であると見做す習慣であつた。或る者は之がケルト人の所謂僧侶なるドルイドによつて建設せられたと想像し、そのため、特に英の考古家オーブレーとスチュークリーの時以來、ケルト或はドルイドの記念物といふ名で記述されて來たのである。しかし最近の研究からして、この種の遺物の本來の目的が葬式にあつて、入口の通廊の附いた巨石の室は家族の埋葬所として用ゐられたことが疑は

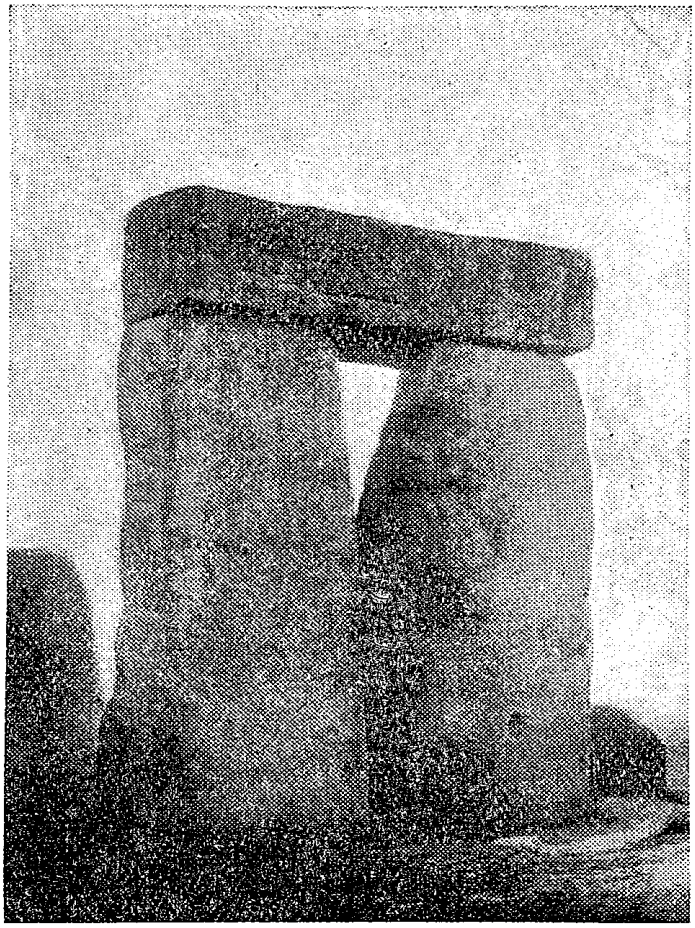
れない。その何れもが祭壇に使用せられたものであるといふ説に反對して、室を構成せる石の最も滑かな最も平たい面が常に内方に向つてゐることに注意された確實なる證據がある。のみならず、コップ或は他の原始的記號が、頂石の上に見出されたとき、そは殆んど常にその下側にあつて、ケリアヴァル、ケルカドー、ドル・アル・マルシャンのドルメンに於ける如きその側に見られる。又モルビアンのガブリーニの大高塚の三面の室を構成せる六石の全部及びその長き入口の通廊(四十四呎)の兩側をなせる石の大部分はアイルランドのニュー・グランジの室の壁面のそれに全く類似せる原始的切込み模樣を以て精巧に彫刻されてゐる。庭園の芝生の如く一樣に平坦なる大圓形圍繞の中心にあるその位置からして、ベルファストの附近なる巨人の環内のドルメン位、犧牲の場所たることを暗示するものはない。がしかし、その上側に於て、珍らしく丸い面を呈してゐる事實花崗岩の漂石に外ならぬその頂石位、斯樣な目的に對して不適當なるはないのである。



Marchands のドルメン（ロクマリアケル）

是等原始の石記念物の構造と進化の上に何等年代的系列は見出されない。又諸國に於けるその存在と特殊の形狀も同時性を表示することが何等言へないのである。アフリカのドルメンは鐵器時代に特有なる物品を包含することが屢々見出された。インドの或る部分の人民はなほメンヒル、クロムレク、ドルメ

ン、その他の巨石記念物を建設する風習であると言はれてゐる。スカンヂナヴィヤの考古學者はそのドルメンを專ら石器時代に配當してゐる。石器時代の有室大石塚に續いて、この種類の建築物の退化の一時期がブリテンに發生し、青銅器時代の古墳がドルメンに代はり、是等が又廢れて單なる土葬になつたやうに見える。スカンヂナヴィヤに於ては、巨石の室は火葬によると將たガムラ・ウプサラに於けるトル、オヂン、フレーヤの三大土丘に見られる如き大高塚に於ける土葬及び今日クリスチァニヤ(今のオスロー)の博物館に陳列せるヴァイキングの船の發見の場所なるザンテフィヨルドの Gokstad の船墳(シップ・バロー)による土葬であると

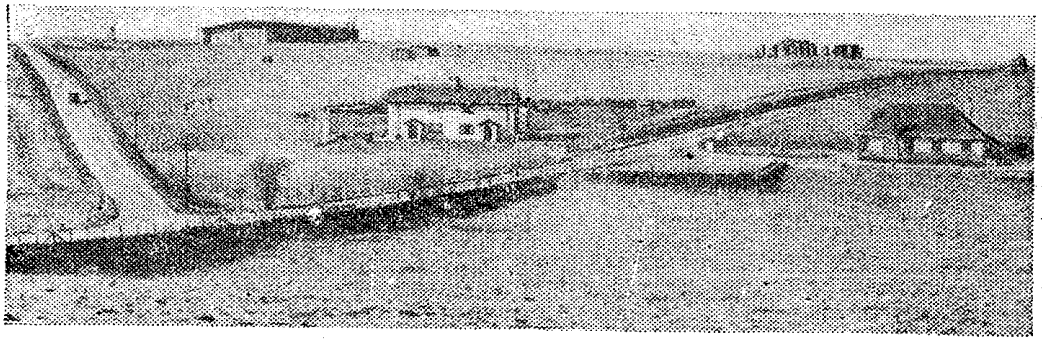


ストーンヘンジの石

を問はず、埋葬用としては鐵器時代に放棄せられた樣である。

自然の作品と人爲の作品との間の丁度境目のところに所謂搖石(Rocking-Stone, *Logan* or *Loggan*, stone フランス語の *pierre (vanlante)* が這入つて來る。之は普通、氷河に運搬せられた大漂石に外ならないのであつて、岩床の上に見事に均衡を保ち、手で輕く押すと之が搖ぐ樣になつてゐる。斯樣な石は原始の石記念物の占有せる全地域に稀薄に分布してゐる樣に見える。さうして之が頗る大なるため、神秘的なる自然の作品の崇拜者の心中に、驚異の念を起させるものと特に推定せられてゐる。故にスチュークリーその他第十八世紀

の考古家達によつて發明せられたドルイド宗なるものに於て是等に重要なる地位が賦與せられた。或る搖石は岩の下をくり抜き、各石に岩を載せる廻轉軸の如き突起部を殘してあるので、顯然人工的であるけれども、之に反して、自然の原因も、また類似の結果を生ずることがあつて、外部の風化作用は全周圍に行はれつゝあるのに、石そのものは岩床の中央部を保護する蝙蝠傘の如くに作用するのである。同一行程は屢々高さ數呎の氷柱の上に巨石の止まれることが見受けられる氷堆石を運搬せる氷河に於てよく說明せられる。人が往々斯樣なる顯著な自然現象を模倣せることは全く有り得ることで、この點に於て、搖石は原始の石記念物の範圍に這入るのである。



ストーンヘンジ遠望

右方上端に見ゆる石群がストーンヘンジ、右端の石がFaiar's Heel である。（タイムス週刊より複製）

參考書目 Fergusson, *Rude Stone Monuments*; W. C. Borlase, *The Dolmens of Ireland*, etc; de Mortillet, *Le Préhistorique*, etc.; Borstetten, *Essai sur les dolmens*; P. Bezier, *Inventaire des Monuments mégalithiques du département d'Ille-et-Vilaine*; *Congrès international d'anth. et d'arch. préhistoriques* (13 vols., 1860-1906) *Matériaux pour l'histoire primitive et naturelle de l'homme* (22 vols.; 1865-1888), continued as *L'Anthropologie* since 1860; *Inventaire des monuments mégalithiques de France*; *Proceedings* of the various Archaeological Societies of Europe.

（註一）日本では立石といふ譯語を用ゆる人もある。孤石、一本石なゞ譯してもよいかも知れない。

間崎万里